

「生きる」こと
 二年〇組 〇〇〇〇
 「もし、自分が癌だと分かたら、こんな生き方ができるだろうか。重い病に冒され、もうすぐ死ぬと分かかっていながら、毎日を精一杯生き、最後まで人の為に尽くす事ができるだろうか。」
 私には考えられなかった。「死」を宣告されるに等しい病名を告げられ、どうやって最期まで生き抜く事ができるのか。
 岩田隆信先生の約一年の闘病日記、胸が熱くなった。
 著者である岩田先生は昭和大学医学部の助教授であり、脳外科の分野で我が国屈指の名医と評される医師であった。しかし、そんな岩田先生の身に悪性脳腫瘍が発病する。
 岩田先生にとって悪性脳腫瘍は医師として携わってきた専門分野だった。今までに多くの患者を診て、最善の治療を施し、多くの命を救ったと同時に、多くの命の最期を看取つ

読んだ本

『医者が末期がん患者になってわかったこと』 岩田隆信

てきたのだ。それだけに、悪性脳腫瘍が癌の
 中でも特に生存率が低く、これだけ医学の進
 歩した今でさえ不治の病と呼ばれている程の
 重い病である事は、先生自身が一番よく分か
 っていただろう。自分が今どういう容態であ
 るかや、この先どのような症状があらわれる
 のかなど、自分の病気を誰よりも正確に診断
 できるだろう。自分の身に襲いかかる病を恐
 ろしい程正確に知っている事は、何も知らな
 い事よりはるかにつらいに違いない。
 そんな状況に陥った事のない私に、岩田先
 生の気持ちは想像などできないものかもしれ
 ないが、死への恐怖ややりきれない気持ちで
 いっぱいだっただろう。「正直に告白しまし
 よう。専門医だからといって、私には『脳腫
 瘍なんか怖くない』とか『真正面から闘いを
 挑む』などという勇氣はとてありません。
 脳腫瘍が怖い。治療がつらい。そして死ぬこ
 とが怖い。∴∴それが、ごまかしようのない
 私の本音なのです。岩田先生は、発病が分か

と昇格もしていただろう。研究をし、新しい
 の人を救っていただろう。助教から教授へ
 がもし病気になっただけならば、もっと多く
 発病して約一年後に亡くなられた。岩田先生
 を失ってしまったような気がした。岩田先生は
 分の医師としての立場、助教としての地位
 そうだ。「これまで営々と築き上げてきた自
 また、岩田先生はこんな事も言われていた
 そんな生き方に心打たれた。
 なってもテープに声を吹き込んで記録した。
 験を書き残した。ペンを握ることができなく
 で治療を受ける患者さんのため」と自身の体
 「今後の医学の進歩のため、同じような病気
 仕事を全うした。そして、病と闘いながら、
 講義に参加したりと、最後まで医師としての
 そう長くはない体で学会の座長を務めたり、
 神力とパワーを感じた。
 をあきらめなかった岩田先生の姿に、強い精
 しかし、私は、精一杯病と闘い、生きる事
 った時こうおっしゃったそうだ。

治療法を発見してもっと有名になっ
 てもしれない。しかし、岩田先生は、重要な地
 位に就く事や有名になる事よりもはるかに素
 晴らしいものを残して下さったと思う。自分
 の病を真正面から見つめ、最期まで懸命に闘
 い抜く事で、私達に生きる勇気を与えて下さ
 った。
 また、死して尚、命の架け橋として重病で
 苦しんでいる方々へ自分の臓器を提供し、移
 植という形で多くの人々を助けられたそう
 だ。岩田先生が医師として生き、そして自らが癌
 に冒されて感じた事、思い、その生き方は、
 先生を支えてこられた家族や周りの方々、本
 を読んだ私達の心の中にずっと残っていくこ
 とと思う。
 私の将来の夢は医者になる事だ。この本を
 読んで一層決意が固まった。ただ病気を治せ
 ばいいのではない事を岩田先生が教えて下さ
 った。医者は常に患者さんと共に生死の狭間
 に立ち、患者さんの命と同時に人生をも背負

い、患者さんの心を支えなければならぬと。岩田先生の日記の言葉は忘れられない。「その時その時にできることの中で、ベストの方法を選んでいくということ、最後まであきらめないこと、：：それが『生きる』ということなのではないかと思うのです。」岩田先生の生き方はまさにこの言葉通りであったと思う。私は、医師という仕事を生き甲斐とし、自ら病と闘いながら生きる意味を教えて下さった岩田先生を心から尊敬する。

尊い命。でも限られた命。早いか遅いかの違いはあっても皆必ず死を迎える時が来る。その時に「精一杯生きたい」と思える様に一分一秒を大切に過ごしたい。

岩田先生のような生き方をしたい。